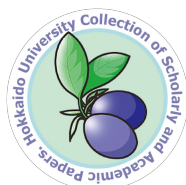




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学英語教育における読解スキル指導の試み：形式スキーマの活用を伴うコミュニケーション活動に焦点を当てた授業編成
Author(s)	亘理，陽一
Citation	教授学の探究，25，85-113
Issue Date	2008-02-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32331
Type	departmental bulletin paper
File Information	kyouzyugaku_85-113.pdf



大学英語教育における読解スキル指導の試み

—— 形式スキーマの活用を伴うコミュニケーション活動に焦点を当てた授業編成 ——

亘 理 陽 一

(北海道大学大学院教育学研究科博士課程)

0. 課題の設定

本稿は、北海道の公立大学一年次のリーディング (reading comprehension, 読解とも言う) 相当科目 (半期週一コマで通年) の実践を通じて、外国語としての英語の読解指導の内容・方法について考察することを目的とする。この授業では、一年を通じて、高校までに習得した英語の基礎的な読解力をさらに発展させることをシラバス上の目標としており、さまざまな英文について、正確かつ的確に内容を理解する訓練を行うとともに、平易な長文の大意を短時間で把握する速読、パラグラフ・リーディングの練習も行い、併せて辞書を使用せずに一定レベルの英文を読み取れる語彙力も身に付けられるような授業を展開することが求められている。

一方、入学してくる学生たちは、英語に関しては成績にも動機にもかなりばらつきがあり、高校生についての次の描写が同じように当てはまる。

- (1) このところ、文単位で読みを進めるのではなく、文章全体に広く目を向け、内容把握に重点を置いた授業を行なうべきであるとの意見が、特に高等学校の英語教育界では一般化している。しかし、一方、教室内での生徒たちに目を向けてみると、このような教師側の目指すところとはかけ離れた反応を示しているようである。教師が、教科書の中の特定のパラグラフに何が書かれているか要約せよと求めても、指名された生徒は、自分のノートに書き付けた訳文を逐一読みあげてしまう、といった光景がいまだに見られるようである。実際に教室で生徒たちの声を拾ってみると、何が書かれているかまとめてみよと求められた場合、物語文については答えやすいが、説明文についてはどうも難しいということであった。まとめる際に、どの文が要約にとってより大切かがわからないために、つい初めから1文ずつ訳を言ってしまう、という意見もあった (津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編) 1992: 109。下線は引用者による)。

高校であれ大学であれ、外国語としての英語の学習においてリーディングは中心的な位置を占めてきたし、英語を読んで理解する行為が学習の主要な役割を担うことは今後も変わらないだろう。しかし、「そもそも『読んで理解する』」ということがどのようなプロセスなのかは必ずしも明らかではなく、主として高校では教科書、大学では大学向けのリーディング教材に基づいて、上のような目標を達成しようと個々の教師が模索しているのが大勢である (JACET SLA 研究会(編) 2005: 183)。そこから速読・多読・精読・音読などの読み方、あるいは映像教材・CALL 教材の活用といった授業運営法が様々な提案されてきたが、外国語としての英語の読解指導において何を教える必要があり、それをどのように指導すべきかということは

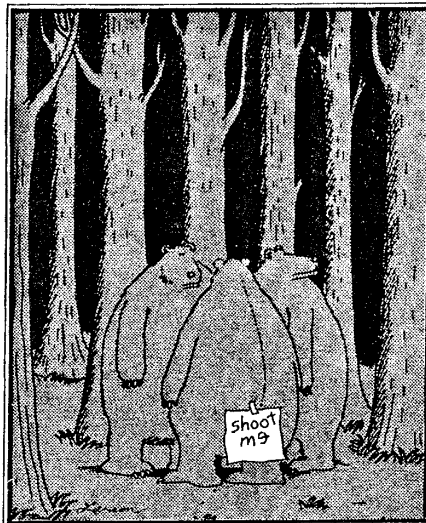
十分に明らかになっているとは言えない。

その中で、読解過程についての諸研究を整理し、読解指導に具体的な提案を行なってきたのが天満（1989）を代表とする津田塾大学言語文化研究所読解研究グループの研究である（天満（1989）、津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ（編）（1992、2002）¹⁾）。天満（1989、2003）は、読解を「文字で書かれたテキストを読むことを通して、書き手の意図する意味内容を理解すること」と定義し、「読み手の持つ背景的知識と書き手によるテキストの相互作用」と説明する（天満 1989: 8; 2003: 54）²⁾。担当授業でも初回のガイダンスで(2)の質問を提示し、英語が「分かる」ためには、語彙・文法の知識に加えて、この「背景的知識」が必要かつ重要である事を伝える³⁾。

(2)

〔質問 1〕

次の絵を見てください。このマンガには、‘Practical jokes of the wild’ というタイトルがつけられています。どういう意味だと思いますか。このマンガから分かることを手がかりに考えてみましょう。そう考えた理由もあわせて書いてください。



Practical jokes of the wild

(タイトルの意味)

(理由)

つまり、タイトルを理解しこのひとコマを味わうためには、言語的知識として ‘practical jokes’ (いたずら)・‘shoot me’ (私を撃って) といった表現の意味を知っているだけでなく、その場面・状況を把握した推論 (「ハンターは野生の熊を銃で撃つことがある」・「野生の熊は、ハンターが銃で狙っていることを知っている」・「野生の熊もいたずらをして仲間をからかうことがある」など) と、英語を使っている人の文化・社会について知っていること (「アメリカ人は、“KICK ME” と書いた紙を使っていたずらをすることがある」) が必要不可欠である。このようなテキストの内容に関する背景的知識は「内容スキーマ」(content schema) と呼ばれる⁴⁾。

それに対して、出だし・展開・終わりといった物語のストーリー構成や、例証・比較・因果関係といった事柄の展開に関する修辭的知識は「形式スキーマ」(formal schema) と呼ばれる (津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編) 1992: 21; 林 2003: 314)。この知識は文章の大意把握に有効であるが、英語に特徴的な形式スキーマを日本語を母語とする英語学習者が自然に身につけるのは難しく、学習者は明示的かつ継続的に学習する必要がある (小西 2002: 116; 寺内 2000: 25)。スキーマの明示的指導の有効性は、津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編) (1992) や高橋 (2000), 寺内 (2000) でもある程度確かめられており、(1)の状況を打破するためにスキーマ指導が大きな役割を果たすと言える⁵⁾。

しかし、明示的・継続的指導の必要性が明らかであるにもかかわらず、天満 (1989) や津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編) (1992) 以降、具体的な指導内容・方法が十分に提案されてきたわけではない⁶⁾。特に、(1)のような状況で、なおかつ大学で英語を学ぶことに胸を躍らせているわけではない (というよりも、これまでの経験から、「英語」と聞くや否や胸が躍らなくなってしまう可能性の高い) 学生たちに、語彙・文法の知識だけでなく、内容・形式スキーマを楽しく学んでもらえるような実践の提案はほとんど見当たらない。

本稿は、天満 (1989) や津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編) (1992) の整理を最大限活かしつつそのような授業の実現を目指した、大学英語教育における読解指導の具体化の試みの報告である。まず 1. では読解スキルの構成と本実践での扱いについて述べ、次に 2. では教科書の扱いと授業の手順について述べることで、本実践の全体像を明らかにする。3. では、その中で特に、論説型の形式スキーマの明示的指導とその活用を伴うコミュニケーション活動⁷⁾ の実践について報告する。最後に 4. では、学生による授業評価をもとに本実践の評価を行う。

1. 読解スキルの焦点化とその扱い

本実践では、形式スキーマや内容スキーマを単独で取り扱うのではなく、それを、英語の文章を読む上で有効ないくつかの方略 (strategies) の中に位置づけた指導を行った。その内容を考える上での基本的枠組みとして依拠したのは、国内外で定評のあるリーディング教材である Mikulecky and Jeffries (2005) の「読解スキル」(comprehension skills) という整理である⁸⁾。読解にかかわる「スキル」は様々に提案されているが、Mikulecky and Jeffries (2005) は読解スキルとして以下の八つを特定している点に特徴がある (Mikulecky and Jeffries 2005: 23-149)。

- (3)・Previewing and Making Predictions (読む前に何らかの情報を得ようとしたり, その文章の先の内容を推測したりすること)
- ・Scanning (できるだけ速く必要な情報を得ようとする)
- ・Making Inferences (書き手が伝えていないこと(物語の時間・場所など)を推測すること)
- ・Building a Powerful Vocabulary (未知語の意味の推測, 類義語・代名詞の読解への活用)
- ・Learning to look for the Topic (何についての話なのか教えてくれる語句を見つけること)
- ・Understanding Paragraphs (パラグラフの構造を把握し, 主旨を見つけること)
- ・Finding the Pattern of Organization (パラグラフ構成のパターンを知り, 区別すること)
- ・Skimming (ある文章・記事・章の概略的意味を得ようとする)

以下では, この八つのスキルの具体例を示しながら, 本実践における扱いについて述べる。

1. 1. 形式スキーマに関わるスキル

Mikulecky and Jeffries (2005) の八つのスキルの中でも特に注目すべき部分は, 形式スキーマに関わる ‘Understanding Paragraphs’ と ‘Finding the Pattern of Organization’ の内容であると考えられる。本稿で取り上げる形式スキーマの明示的指導の中心的内容も, この ‘Understanding Paragraphs’ に位置づく。

1. 1. 1. Understanding Paragraphs

このUnit ではまず, (4)の対比を通じてパラグラフの構造とその良し悪しの基準が説明され, (4a)のような良いパラグラフが, 全て同じトピックについての文で構成されていることを確認する問題と, あるパラグラフに対して個別的過ぎ (too specific) でも広過ぎ (too general) でもない最適のトピックを選んだり考え出したりする問題が設けられている (Mikulecky and Jeffries 2005: 94)。

- (4) a. There are several instruments in the violin family. The violin is the most popular. It is an important instrument in the classical orchestra. It is also played in jazz and country music groups. The cello and the viola have the same shape as a violin, but they are bigger. They are used mostly in classical music. The biggest stringed instrument is the bass. It's so big you have to stand up when you play it. The bass is played in classical orchestras, and it is also often played in jazz groups.
- b. Violins are made of wood. The best old pianos were made in Germany. Musicians spend a lot of time practicing. Sometimes they play for eight hours a day. Most violinists stand up when they play alone. Taking music lessons can be expensive. The kind of wood in a violin is important. Many famous musicians started to study at an early age.

次に, トピックについての書き手の意見を伝える「パラグラフの主旨」(main idea) という概念が導入され, 次のような例で, 主旨がたいてい一文で述べられることが説明される (Mikulecky and Jeffries 2005: 103)。このパラグラフでは, トピック ‘bicycles’ に対する著者の意見が第一文目に述べられている⁹⁾。

- (5) In some parts of the world, many people use bicycles for transportation. First of all, they are much cheaper than cars. They also do not need gas to make them

go. And bicycles are easy and cheap to fix. In cities, bicyclists don't have to wait in traffic. They can always go around a traffic jam. Finally, bicycles don't need parking spaces. They can be parked anywhere.

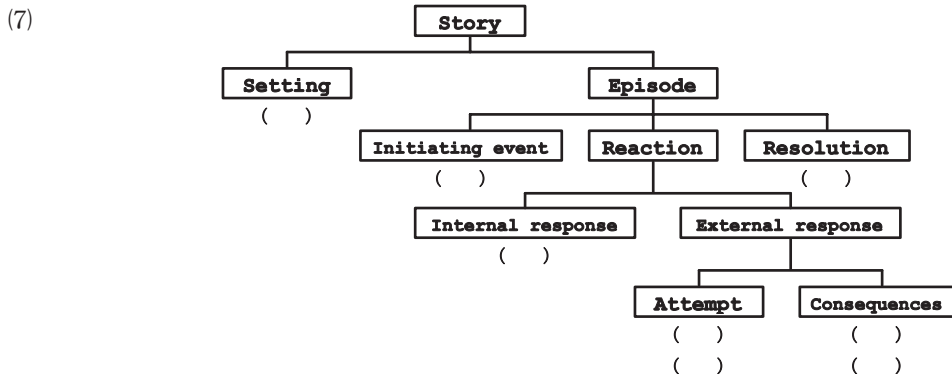
- a. Bicycles are cheaper than cars.
- b. Bicycles are a problem in traffic.
- c. Bicycles are good for transportation.

したがって、選択肢の中で最適の主旨は(5c)であるが、(5a)は主旨としては個別的過ぎる情報で、(5b)はこの段落では述べられていない内容——実際に述べられているのはむしろ反対の内容——だと判断できる。

天満(1989)は、パラグラフの集まり=テキストの構造を、種々の小説や歴史の文章などが属する「物語型」(narration)と、科学的論文やいわゆる説明文が属する「論説型」(exposition)に大きく分け、二つの形式スキーマを詳しく説明している。本実践では、天満(1989)の整理や指導モデルを参考に、それぞれの型についての説明を与え、その活用を伴うコミュニケーション活動を行った。論説型の形式スキーマの指導とその適用を伴うコミュニケーション活動については3.で詳しく報告することにし、ここでは物語型について行った形式スキーマの指導とコミュニケーション活動の概要を述べる。

まず形式スキーマの導入として、次の八つの文を(7)の階層図に位置づけることを通じて、物語が‘Setting’と‘Episode’という主要部分からなることを了解してもらう(天満 1989: 172-3)。

- (6)
- 1. Dylan lives on a farm.
 - 2. One night he heard fox in the chicken coop.
 - 3. He knew he had to kill it.
 - 4. Dylan got his rifle.
 - 5. and went to the chicken coop.
 - 6. He surprised the fox with a chicken in its mouth.
 - 7. Dylan shot the fox where it stood.
 - 8. Dylan buried the fox.



次に, この形式スキーマをより分析的かつ一般性の高い形で活用するために, story map と称した次の構造的分解に(6)を対応させながら各項目について説明する (天満 1989: 190-2)。

(8) Setting: Characters: The most important persons in the story.

→ Dylan

Place: The location(s) where the story takes place.

→ a farm (where Dylan lives.)

Time: When the story happens.

→ One night

Episode: Problem: One or more of the main characters has a difficulty. What is the difficulty or problem?

→ A fox is in the chicken coop (and Dylan had to kill it).

Goal: Usually it involves one or more attempts to solve the problem.

→ To kill a fox.

Event 1 : Dylan got his rifle.

Event 2 : Dylan went to the chicken coop.

Event 3 : (Dylan surprised the fox with a chicken in its mouth.)

Event 4 : Dylan shot the fox where it stood.

Ending: What happened at the end of the story tells how the main characters achieved their goal and solve their problem. The ending may be happy, sad, ironic, etc.

→ Dylan buried the fox.

さらに, 事件の生起順序や比較・理由・結果など, 天満 (1989: 110-1) に列挙されているような, 構造を読み解く手がかり (signaling) となる語句を導入し, (9)の例を通じて——Mikulecky and Jeffries (2005) では ‘Building a Powerful Vocabulary’ の中で扱われる——照応関係についても解説する。

(9) a. Youichi lives in Sapporo. **He** is a student.

b. Youichi washed the windows. He did **it** very quickly.

c. **This** is why I’ve come to see you.

以上を踏まえて ‘Give me a big picture!’ と題するコミュニケーション活動を行った。まず各グループに一つ, 表紙を除いて見開き二ページ 14, 5 枚からなる Leo Lionni の作品 (*Swimmy* (1963), *Frederick* (1967), *Alexander and the Wind-Up Mouse* (1969))¹⁰⁾ を順番をバラバラにして渡し, 合わせて配布されたプリントのアウトラインに沿って story map を作成しながら正しいと思う順序に並び替えてもらった (各グループの作業負担が偏らないように, 後二作はそれぞれ二グループで分担した)。次に, 各グループに対して 4 (ないしは 5) 箇所のセリフや文章を key points として指定し, 「字幕」として提出することを求めた。最後に, 自分たちが予想した順序で紙芝居のように作品を朗読していく。朗読について課された条件は必ず全員朗読することのみで, 単純にページ数で割り振っているグループもあれば, 配役を決めて読むグループもあった。他のグループは, 配布された story map をもとに順序の

成否を判断しながら、朗読・字幕の出来栄を評価した。朗読・字幕の出来栄は、相互評価で「言葉のところが感情的によんでいてきいて楽しかった」、「長い文章の訳が本当に絵本にそのまま出てきそうな感じでよかった」といった肯定的感想をもらうものからそうでないものまで多少の幅が見られたが、物語の順序については全てのグループが正解した。

1. 1. 2. Finding the Pattern of Organization

‘Finding the Pattern of Organization’ の Unit では、英語の文章で特徴的に用いられるパターンが ‘Listing’ ・ ‘Time order’ ・ ‘Comparison’ ・ ‘Cause/effect’ の 4 つにまとめられ、それぞれのパターンに書き手が用いることの多い ‘signal words’ が整理されている。

Listing は、理由や具体例などを挙げて主旨について詳しく説明するために書き手が用いるパターンである¹¹⁾。例えば (10a) では、ダイヤモンドが高価だという一文目の主旨について、その理由が列挙されている。下線で示された、Listing に特徴的な signal words に注目すると、(10b) のように詳細を見つけて整理するのが容易になる (Mikulecky and Jeffries 2005: 111)。

- (10) a. **Diamonds are expensive for several reasons.** First, they are difficult to find. They are found in only a few places in the world. Second, they are useful. People use diamonds to cut other stones. Third, diamonds do not change. They stay the same for millions of years. Finally, diamonds are beautiful.

b. **Signal words Details (reasons)**

<i>first</i>	<i>difficult to find</i>
<i>second</i>	<i>useful</i>
<i>third</i>	<i>do not change</i>
<i>finally</i>	<i>beautiful</i>

- (11) Listing の signal words:

first, second, third, and, also, too, one, another, other, last, finally, for example

Time order は、継時的にストーリーを語ったり何かをする手順を説明したりするために書き手が用いるパターンである。例えば、(12a) ではアインシュタインの生涯というストーリーが時間順に説明されており、(13a) ではおにぎりを作る手順が説明されている (Mikulecky and Jeffries 2005: 115; 遠山 1994: 78)。

- (12) a. **Albert Einstein lived and worked as a physicist in several countries.** He was born in 1879 in Ulm, Germany. At the age of twenty-six, he graduated from the University of Zurich in Switzerland. In the same year, he did his most famous work in physics. In 1921, he won the Nobel Prize for Physics. Between 1919 and 1933, he lived in Germany. He also traveled a lot to talk with other scientists. Then he had to leave Germany because of Hitler and the Nazi Party. He moved to the United States in 1933 and began working in Princeton, New Jersey. Einstein died there on April 18, 1955.

b. **Signal words** **Details (events)**

1879	<i>born in Germany.</i>
<i>At the age of 26</i>	<i>graduated from the University of Zurich</i>
<i>same year</i>	<i>did his most famous work in physics</i>
1921	<i>won the Nobel Prize for Physics</i>
1919/1933	<i>lived in Germany</i>
<i>then</i>	<i>left Germany because of the Nazi</i>
1933	<i>moved to the US</i>
	<i>began working in Princeton</i>
<i>Apr. 18, 1955</i>	<i>died there</i>

- (13) a. First, cook rice. Then put some of the rice in an *onigiri* maker. Place salmon meat, *umeboshi*, or whatever you like in the middle. Then make one and wrap it with *nori*.

b. **Signal words** **Details (steps)**

<i>First</i>	<i>cook rice</i>
<i>Then</i>	<i>put some of the rice in an onigiri maker</i>
	<i>Place salmon meat, umeboshi, etc.</i>
<i>Then</i>	<i>make one</i>
	<i>wrap it with nori</i>

- (14) Time order の signal words:

- a. 日付や時間 (years, ages, days)
b. first, next, last, before, after, soon, then, later, while, during, at last, finally

Comparison は、二つのトピックについて、その異同を示すために書き手が用いるパターンである。例えば (15a) はアメリカとカナダの医療を比較して類似点と相違点を述べている。もちろん、類似点、相違点のいずれかのみを述べるパターンもある (Mikulecky and Jeffries 2005: 122-6)。

- (15) a. **Medical care in the United States and Canada is similar in some ways.** The doctors and hospitals in both countries are excellent. They have the same medicines and ideas about how to take care of patients. **However, the way people pay for medical care is very different.** In Canada, everyone, rich or poor, has health care. People pay a tax to the government, and the government pays the doctors and hospitals. In the United States, on the other hand, insurance companies pay the medical bills. People have to pay a lot of money to the insurance companies. Many poor people cannot afford to pay for insurance, so they don't have good medical care.

b. *Likenesses*

doctors and hospitals are excellent
medicines and ideas about how to take care of patients

Differences

CA: *the government pays the doctors and hospitals
everyone, rich or poor, has health care*

US: *insurance companies pay the medical bills
many poor people don't have good medical care*

(16) Comparison の signal words:

Likenesses: *alike, similar, same, also/ too, both*

Differences: *different, unlike, more/ less than, but/ however, on the other hand*

Cause/effect は因果関係を示すために書き手が用いるパターンで、(18)に例示されるように、原因が先に来るか結果が先に来るかで signal words のタイプを区別することができる。ただし、常に一つの文に原因と結果が含まれるというわけではなく、(17a)のように一つの原因が多くの結果をもたらしているパターンや、逆に一つの結果に多くの原因があるパターンもある (Mikulecky and Jeffries 2005: 127, 130)。

- (17) a. **A cold winter can cause serious problems in Florida.** The farmers there grow a lot of oranges. Very cold weather causes orange trees to die. Cold weather also results in fewer tourists. There are many hotels and vacation places in Florida. These places are in trouble if there are fewer tourists. Finally, very cold weather can cause health problems. Many people do not have heating in their homes, and they become ill from the cold.

b. Cause	Signal words	Effects
<i>cold winter</i>	<i>can cause</i>	<i>problems</i>
	<i>causes</i>	<i>orange trees die</i>
	<i>results in</i>	<i>fewer tourists</i>
	<i>can cause</i>	<i>health problems</i>

(18) Cause/effect の signal words:

- a. the cause comes first: Shoes with high heels can cause foot problems. so, leads to, can cause, can help, helps, can make, makes, can effect, can stop, stops, is a cause of, can result in, results in
- b. the effect comes first: Foot problems can be caused by shoes with high heels. because, because of, is due to, is the effect of, is caused by, results from, is made by

本実践では、教科書の各章に ‘Patterns of Thinking’ として用意された問題群が——Mikulecky and Jeffries (2005) のような分類は行っていないが——この内容に該当するため、この部分を教科書読解の中心に位置づけることで、段落の構成パターンの指導を継続的に行った。最終回では、上に示した例で各パターンとその特徴についてまとめた上で、練習問題として Mikulecky and Jeffries (2005) から選んだいくつかの問題に取り組んでもらった。

1. 2. 内容スキーマに関わるスキルとその他のスキルの扱い

残りの六つのスキルは、主として内容スキーマに関わるものと、形式・内容の両面に関わるものからなる。

‘Previewing and Making Predictions’ の Unit には、封筒から私信かビジネス・レターかを判断したり、写真や絵からそこでの行動や物語の内容を予測したりする問題、あるいは(19)のように、続く内容として最も蓋然性の高い文を判断する問題などが用意されている (Mikulecky and Jeffries 2005: 32)。一方、‘Scanning’ の Unit では、表や索引、新聞広告・記事などから指示に従って必要な情報を見つけ出す問題に取り組むことになる。

(19) There were many good shows on TV last night. The Smith family stayed home.

- a. They turned off the TV and went to bed early.
- b. The only interesting show was about traveling by bicycle.
- c. They saw a play, a music show, and the news.

本実践では、先の内容を予測することやできるだけ速く情報を探すことを間接的に求めることはあるものの、‘Previewing and Making Predictions’ と ‘Scanning’ については明示的指導を行っていない。まず ‘Scanning’ で要求されるのは、もっぱら単純な視覚的探索である (Mikulecky and Jeffries 2005: 279) 。 ‘Previewing and Making Predictions’ については、内容スキーマに照らして蓋然性の高い展開を予測することは重要だが、その内容・方法に明示的整理が有効性を持つような体系性はなく、そこで求められる背景的知識も、英語を使っている人の文化・社会特有のものというよりは、人間社会についての「常識的知識」 (common-sense knowledge) である (天満 1989: 39-40)。

本実践では、この常識的知識を言語的手がかりと結びつけるコミュニケーション活動を ‘Making Inferences’ について行っている。 ‘Making Inferences’ の Unit には、対話や文章を読んで、話題や場所・人物の特徴・出来事の原因などの明示されていない内容を推測する問題が設けられている。例えば(20)で読み手は、 ‘line’ ・ ‘get in’ ・ ‘tickets’ ・ ‘show’ ・ ‘popcorn’ などの単語を手がかりに、二人が映画を観ようと映画館の前に来て話しているのだと推測できる (Mikulecky and Jeffries 2005: 53)。

- (20) A: Look at the long line! Do you think we'll get in?
B: I think so. Some of these people already have tickets.
A: How much are the tickets?
B: Only nine dollars for the first show. I'll pay.
A: Thanks. I'll buy some popcorn.
- 1. Where are these people?
 - 2. What are they talking about?
 - 3. Which words helped you guess the topic?

これを例として、Mikulecky and Jeffries (2005) から選んだ同様の対話についてグループ毎に推測するコミュニケーション活動を ‘Guess what.’ と題して行った。まず、配布されるプリントにはA・Bいずれかの発言しか載っておらず、学生はペア・ワークで相手の発言を聞き取って対話を完成させることが求められた。次に、質問に対する最終的な予想をグループで話し合い、代表者二名がその推測に基づいて他のグループの前で対話を二度演じ、同じ質問を予想してもらった。グループ毎に配布される対話は異なるので、他のグループは彼らの演示のみを手がかりに話題や場所を推測しなければならない。より多くのグループに正解させたグループが勝ちとなる。発音の流暢さにはこだわらず、空港へ向かうタクシー車中のやり取りやバス停での対話について、自分たちの推測する展開が伝わりやすいと思うやり方で自由に演じても

らった。最後に各グループの対話と質問の答えをまとめた資料を配布し、‘Making Inferences’についてまとめた。

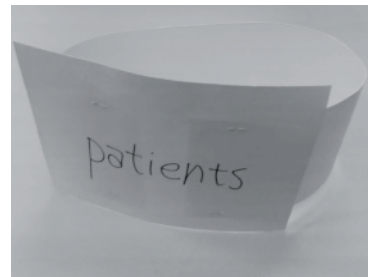
‘Building a Powerful Vocabulary’のUnitには、周りの単語や文を手がかりに単語を補充したり意味を推測したりする問題や、代名詞や類義語句による指示関係を把握する問題が置かれている。本実践では、教科書の文章を読み、そこにある問題に取り組む中でもこれに相当する内容が基本的には扱われていると判断し、1. 1. 1. の(9)で述べた以外の明示的指導を行っていない。ただし、語彙の意味関係は‘Learning to look for the Topic’についての明示的指導で部分的に扱っていると言うことができる。

‘Learning to look for the Topic’のUnitでは、次の二つの例を通じて、トピックを表す語句には事物の集合名(21a)と部分から成る事物の名前(21b)のいずれかがあることを説明し、ある単語群のトピックを考えたり、逆に与えられたトピックに属する単語を分類したりする問題が用意されている(Mikulecky and Jeffries 2005: 84)。

- (21) The topic is _____.
- a. football baseball tennis sports skiing
- b. nose ears eyes mouth head chin

このトピックを考える活動を、Yes-No 疑問文の練習などによく利用される ‘Who am I?’ をアレンジしたコミュニケーション活動として行った。まず、学生は配布されたプリントで(22a)のような3つ(ないしは4つ)の「何か」についての説明文(2)を読み、それが何であるかとともに、全てに共通するもの＝トピックを考えることを求められる。次に、(22b)のように一人ひとり違う語句の書かれたものをかぶる(かぶる前は付箋が貼ってあり、何が書かれているかはかぶる人には分からない)。

- (22) a. A _____ (C) is any person who receives medical attention, care, or treatment. The person is most often ill or injured and in need of treatment by a physician or other medical professional. Health consumer, health care consumer or client are other names for _____ (C), usually used by governmental agencies, insurance companies, and/or _____ (C) groups. Some have argued recently that the term should be dropped, because it underlines the inferior status of recipients of health care.
- b.



Yes/No で答えられる質問を一回につき1つ順番にしていくことで、できるだけ早く書かれた語句を当てるのがゲームの目的だが、グループの他のメンバーがかぶっている語句を見ると、それが配布されたプリントで説明されていた「何か」であることに気づく。ただし、各人に異なるプリントが配布されており、自分のプリントには答えの「何か」についての説明だけがなく、他のメンバーがかぶっている ‘doctor’・‘nurse’・‘medicine’・‘bed’ についての同様の説明文が載っているのである。これらの語句に共通するトピック ‘hospital’ に気づくことが

できれば、自分がかぶっている語句も予想しやすくなる。他のグループは‘foods’・‘furniture’・‘transportation’・‘things for eating and drink (cutlery)’といった別のトピックについてそれぞれ同じことを行った。次に、同じ手順で‘Ichiro’・‘Hayao Miyazaki’・‘Hello Kitty’・‘Puffy (AmiYumi)’・‘Ken Watanabe’についてグループ対抗戦を行った。今度は配布されたプリントをもとに代表者がかぶる語句について、グループで相談しながら予想し質問する。ここでは正解の順位は問題ではなく、出揃ったところで各正解に共通することはいかを考えてもらうのが主眼である。意図した正解は‘Famous Japanese in America’で、実践では2～3グループが正解か正解に近い解答を導き出した(2006年度末のあるTV番組での調査に基づく)。

‘Skimming’のUnitには、(23)のようにキーワードに注目して著者の見解・立場をできるだけ早く読み取る問題や、パラグラフの構成パターン・主旨を同様に素早く読み取る問題が用意されている。

- (23) Dogs are often a problem at home. Many dogs are noisy and dirty. They may even be dangerous for small children.

→ Is this writer for or against dogs at home? for/against

本実践では、教科書の文章を初めて読む際に、時間を測って速読してもらい、文章を見返さずに大意を問う問題に答える作業を行うことで‘Skimming’の指導を継続して行った。

2. 授業の手順と概要

2007年度の授業では、他の担当教員と共通の教科書として *The Powerful Reader Basic* (MacMillan, 2001) を使用することになっている。シラバス上は一つの章を二回かけて取り扱い、全12章を通年で読むことになっているが、具体的な扱い方やそれ以外の教材の使用については各教員の裁量に任されている。そこで、Side A と Side B の二回を一つの単位として、1. で解説した読解スキルの指導及びコミュニケーション活動をその中に組み込んだ半期の授業を構成した。ここでは、各 Side の具体的な手順について述べる。対象は、男女比(約1:3)と出身校に偏りが生じないように編成された22名と20名の二クラスで、どちらの Side も基本的にグループ単位(4(5)人×5グループ)で進めた。

Side A は、‘Improving Your Reading Skills’ と ‘Comprehending the Text’ の二つのセクションからなる。まず ‘Improving Your Reading Skills’ では、前半60分程度を使って、1. および3. で解説した読解スキルの指導とその適用を伴うコミュニケーション活動を行う。次に ‘Comprehending the Text’ では、教科書の各章のテキストについての簡単な導入を行い、スクリーン上にストップウォッチを表示して ‘Skimming’ 作業を求める。*The Powerful Reader Basic* にもこれまでの読解研究の影響が反映されており、各章の表紙には、読み手の知識を活性化させることを目的とした ‘Prereading’ 用の写真・挿絵とその説明文が用意されている(柴崎 2003: 165)。導入では、これを利用して人物・場所・時代背景などについて画像や情報を補いながら簡単な解説をする。また、テキストは各章ほぼ400語前後で構成されているので、学生は、読むのに要した時間を記録することで自分が一分間に何語程度読めるのかを定期的に把握することができる。読み終わり次第、教科書(‘FIRST READING’) を利用した大意を問う設問二問に答えてもらう。この作業全体に、後半15分程度が充てられる。

最後に、グループ毎に段落を割り当て、Side Bの前日までに日本語での要約を各自メールで提出すること、および次回の授業までに教科書の‘NEW WORDS IN CONTEXT’を予習しておくよう求めた。

Side Bは、‘Comprehending the Text’と‘Understanding the Point of Grammar’の二つのセクションからなる。‘Comprehending the Text’では、‘NEW WORDS IN CONTEXT’に登場する単語から5個を選び、英英辞典の定義・例文を用いた単語テストを冒頭に行なう¹³⁾。次に、CDによる朗読に合わせてテキストに目を通し、教科書に用意された読解問題に取り組んでもらう。中心に位置づくのは、本文の主旨の把握(‘Understanding Main Ideas’)とパラグラフ構成のパターンの理解(‘Patterns of Thinking’), および推論(‘Making Inferences’)に関する選択式の設問¹⁴⁾で、まずは各人に一通り予想してもらい、その後グループ対抗戦として、一問ずつグループ内で予想をつき合わせ、グループとしての答えをまとめて発表してもらって正解数を競う。読解問題には、個人・グループでの作業を合わせて、40～45分が充てられる。読解問題終了後、提出された要約にコメントをつけたものを配布する。いずれも学生の名前は明示されていないが、各段落につき一つが「優秀要約」として位置づけられている。優秀要約とそのコメントを見ることで、学生は自分の要約の改善点を把握でき、全体としてその章のテキストの要約として利用することができる¹⁵⁾。

‘Understanding the Point of Grammar’では、種々の文法解説書を利用しながら、テキストと関連する文法概念の要点を扱う問題に取り組んでもらう。大きくは名詞句→動詞句→形容詞句・量化表現・その他という通年の大域の順序¹⁶⁾を想定し、前期は、(不)可算名詞・冠詞・関係(代)名詞・進行相・現在完了時制・未来時を表す表現の6つを取り上げた。例えば、未来時を表す表現については、大西&マクベイ(2006)やミントン(1999)、遠山(1994)に基づいて、⑭のような一連の問題を提示し、最後に⑮のようなまとめの解説と練習問題を配布した(大西&マクベイ 2006: 93-105; ミントン 1999: 1-19; 遠山 1994: 30-9)。本実践では、こうした文法の使い分けの理解が間接的な形で、前の教科書読解や活動の理解を補足し、後の読解や活動に活用されることを期待した。

⑭ a. 問題1: 適切な方を選んで会話を完成させてください。また、なぜその表現を用いるのが適切なのかも考えてください。

1) Koume: Daddy, can you help me with my math homework sometime today?

(パパ、数学の宿題やるの今日手伝ってくれない?)

Dad: All right. I (‘ll/ ‘m going to) do it this afternoon.

(いいよ。じゃあ、午後にやろう。)

2) Mom: Koume told me that she wants you to help her with her homework sometime today.

(パパに今日、宿題手伝ってもらいたいわって、小梅が言ってたわよ。)

Dad: I know. I (‘ll/ ‘m going to) do it this afternoon.

(うん。今日の午後、見てあげるつもりなんだ。)

b. 問題2: 適切な方を選んで会話を完成させてください。

1) (夏休みの旅行で京都に行くという陽一くん。お母さんが心配そうに…)

Youichi: Mom, can I go on a trip to Kyoto? We’re going to Otaru and then taking the ferry over to Maizuru.

Mom: But Youichi, you ('ll/ 're going to) be sick. You always get sick on boats.

2) (フェリー一船上にて…)

Yui: Are you OK, Youichi? You look a bit green.

Youichi: I'm OK. I.....

Yui: Quick, get a plastic bag! He ('ll/ 's going to) be sick!

c. 問題3: 話はちょっと古いですが, 「プロポーズ大作戦」第1話。あなたは, 山ピーにショッキングな事実を伝えねばなりません。彼女の結婚を一番現実的なものとして伝えるのは, 次のうちどの表現だと思いますか。

ア) She is getting married next month.

イ) She is going to get married next month.

ウ) She will get married next month.

d. 問題4: 陽一くんが京都に行くのが今月31日の予定だとします。英語でスケジュール帳に書くとき, どの表現が適切だと思いますか。

ア) Go to Kyoto.

イ) Going to Kyoto.

ウ) Gonna go to Kyoto.

エ) Will go to Kyoto.

(25) 解説: 「未来を表す表現」

◇ WILL

□ その瞬間に何かやろうと決めたとき

a. I'm exhausted! I think I'll go to bed.

(疲れた一。もう寝るよ。)

□ 漠然とした推測・意志を表す(「このままいけば当然そうなる」と, 自分では思っている)とき

b. I'll return to my office after the class.

(授業の後, 研究室へ戻ります。)

◇ 進行形

→未来の出来事を引き起こす要素(原因・意図)が現在すでにあるとき

□ BE GOING TO; 現在～へ向かって行く途中である

c. I'm going to return to my office after the class.

(授業の後, 研究室へ戻るつもりです。)

→もうすでにやると決めてあることについて述べるとき

d. Watch out! The vase is going to fall.

(気をつくれ! 花瓶が落ちそう。)

→もうすでに事態が動き出していることについて述べるとき

□ 進行形; 現在は～している途中である

e. I'm returning to my office after the class.

(授業の後, 研究室へ戻る予定です。)

→BE GOING TO よりも具体的な予定・計画を表すとき

◇ 現在形

□ 確実な未来・決まりきった予定を表すとき

f. I return to my office after the class.

(授業の後、研究室へ戻ることになっている。)

g. The term-end exam in English IA falls on a Thursday.

(英語 IA の期末テストは木曜だよ。)

以上の手順による半期の授業の概要は、(26)のようにまとめられる。全体として Side A と Side B のサイクルは、学習者の言語的コミュニケーション能力を高めるためには、言語的諸能力を積み上げる領域と、その時点での能力の総体を運用させるような総合的な課題に取り組ませる領域との往復運動を繰り返すことが必要だという考えを、授業者の裁量で可能な範囲で具体化したものと言える¹⁷⁾。

(26)

回	期日	教科書	コミュニケーション活動	メタ言語知識 ¹⁸⁾
1	4/11	ガイダンス (授業の進め方・評価方法、グループ分け)		
2	4/18	Chapter 1 : “The East Dresses the West” ・本文の Skimming (→(23))	・Who am I? (→ 1. 2. (22)) 他の人の答えについての説明文を読み、Yes/No で答えられる質問をして自分が何なのか、他と共通することは何なのかをあてる	・Learning to look for the Topic (→(21))
3	5/2	・単語テスト ・読解問題 : ‘listing’, ‘comparison’ (→(10)–(11), (15)–(16))		(不)可算名詞 ・‘noise’ vs. ‘noises’ ・‘apples’ vs. ‘apple’ ・I ate 鶏肉 yesterday.
4	5/9	Chapter 2 : “Culture Connections and Language Loss” ・本文の Skimming	・Guess what. (→ 1. 2.) 発言を聞き取って対話を完成させ状況を推測し、他のグループの前で演じる	・Making Inferences (→(20))
5	5/16	・単語テスト ・読解問題 : ‘comparison’		冠詞 ・‘the/a/some’ の違い ・‘the’ の文脈条件 ・‘the/a/some’ と ‘ゼロ冠詞’ の使い分け
6	5/23	Chapter 3 : “The Impressionists: Beauty has no borders” ・本文の Skimming	・Give me a big picture! (→ 1. 1. 1.) 頁がバラバラになった絵本を story map を作成しながら整序し、key points の字幕を作成する	・Understanding Paragraphs: Narrative structure (→(6)–(9))
7	5/30	・単語テスト ・読解問題 : ‘comparison’, ‘time order’ (→(12)–(12))		関係代名詞 ・制限用法 vs. 非制限用法 ・非制限用法の「補足」用法 vs. 「継続」用法 ・制限用法の「特定」用法 vs. 「分類」用法

8	6/6		・Give me a big picture!: Public reading (→ 1. 1. 1.) 自分たちの予想した順序 で紙芝居のように絵本を 朗読し, 朗読・字幕の出 来ばえを相互評価する	
9	6/20	Chapter 4 : “A Wallflower’s Story: Building confidence in College” ・本文の Skimming	The Editorial “We”① (→3. 2. 1.) 各グループで地球温暖化 とは何かを話し合って理 解を深め, それを説明す るのに必要十分な記事の 要約を作成する	
10	6/27	・単語テスト ・読解問題 : ‘listing’, ‘cause/effect’ (→(17)–(18))		進行相 ・過去時制 vs. 過去進行形 ・完結動詞 vs. 非完結動詞 ・瞬間動詞 ・現在進行形 vs. 現在時制 ・状態動詞の進行形
11	7/4	Chapter 5 : “Family Values: Ch- anging American Life- styles” ・本文の Skimming	The Editorial “We”② (→ 3. 2. 2.) 各人が読んだ異なる新聞 記事の内容をグループに 持ち寄ることで, 温暖化 によって自然や社会にも たらされる変化・問題を 複数の観点から捉え, 自 分たちの記事で特に何を 伝えたいかを考える	
12	7/11	・単語テスト ・読解問題 : ‘listing’		現在完了 ・過去時制 vs. 現在完了 (継 続用法) ・結果用法 ・完了用法 ・経験用法
13	7/18	Chapter 6 : “We, The People: Docu- ments America Lives By” ・本文の Skimming	The Editorial “We”③ (→ 3. 2. 3.) 温暖化に対してどのよう な具体的対策があり得る のかを概観し, 自分たち の記事で紹介するものを 選び取って, 構成を固 める	
14	7/25	・単語テスト ・読解問題 : ‘time order’, ‘listing’, ‘cause/effect’		未来時を表す表現 (→(24)–(25))
15	8/1			・読解スキルのまとめ

3. 論説型の形式スキーマの指導とその適用を伴うコミュニケーション活動

本実践では、1. 1. 1. で述べた「論説型」の文章について、例題で形式スキーマの解説を与え、雑誌・新聞の記事の主旨を抜き出し、地球温暖化についてA4一枚の記事を作成するというコミュニケーション活動「The Editorial “We”」を三回かけて行なった。英文記事は、ニュースの核心であるHeadline（見出し）と記事内容を圧縮したLead（リード、導入パラグラフ）、その詳細を述べるBody（本文、解説）から成り、論説型の文章構造を見るのに適している（天満・ベレント 1996: 11）。新聞・雑誌記事はこれまでの多くのリーディング教材・実践でも利用されてきたが、本実践ではそれをただ読むのではなく、作るために読んでもらい、その中で論説型の形式スキーマが活用されるようなコミュニケーション活動の材料として利用した。最終的に提出する記事のレイアウトや内容の方向性は各グループの自由に任せたが、見出しとリード、および「WHAT IS GLOBAL WARMING?」・「WHAT HAPPENS NEXT?」・「WHAT CAN WE DO?」の3つの部分からなるsample outlineを提示し、「‘global warming’ とは何か（現象・原因）を説明する段落」・「‘global warming’ によって自然や社会にもたらされる変化・問題（の予測）を説明する段落」・「‘global warming’ をくい止めるための具体的対策3つを紹介する段落」を本文（Body）に置くことを条件とした。三回のコミュニケーション活動は、この3つの構成部分を作る（ための素材の分析）活動に対応している。

3. 1. 形式スキーマの導入

最初のコミュニケーション活動に入る前に、論説型の形式スキーマについて、(4)-(5)の例題や次の(27)-(29)の解説を通じ、パラグラフの構造について説明した（天満 1989: 104-6; 1994: 39-40）。パラグラフが主旨を述べる主題文とそれを支える補充文からなり、主題文はパラグラフの冒頭に來ることが多いということは、例題と今までの内容で問われてきたことのまとめである。これ以降のコミュニケーション活動では特に、複数のパラグラフからなる文章も主題（が述べられている段落）を中心とする同様の構造をなしているということに注目させるのがねらいとなる。

(27) The structure of a paragraph

☐ Topic sentence (主題文)

そのパラグラフで書き手が主張しようとしていること（主旨）を述べる文。パラグラフの最初の位置に來ることが断然多いが、最後や中ほどに來ることもある。

☐ Complement sentence(s) (補充文)

主題をより詳しく説明、描写したり、例を挙げたり、他のものと比較したり、原因や理由を述べたりするような文。

(28) (= (4a))

☐ There are several instruments in the violin family.

■ The violin is the most popular.

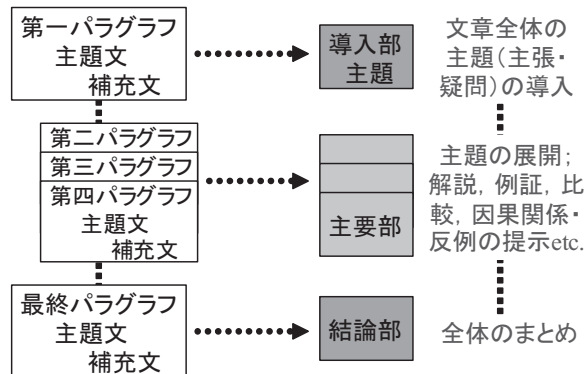
- It is an important instrument in the classical orchestra.
- It is also played in jazz and country music groups.

■ The cello and the viola have the same shape as a violin(,)

- (but) they are bigger.

- They are used mostly in classical music.
- The biggest stringed instrument is the bass.
- It's so big you have to stand up when you play it.
- The bass is played in classical orchestras(,)
- (and) it is also often played in jazz groups.

(29) The structure of paragraphs (= 'text')



3. 2. コミュニケーション活動 ‘The Editorial “We”’

3. 2. 1. WHAT IS GLOBAL WARMING?

この活動では、各グループで地球温暖化とは何かを話し合って理解を深め、それを説明するのに必要十分な記事の要約を作成するのが目的である。

まず、地球温暖化のメカニズムや CO₂ 排出量・気温変化の予測、温暖化問題に対する意識調査をまとめた図表、過去と現在の氷河の状態を対比する写真を載せた資料を配布し、グループの記事の方針を形づくる目的で、温暖化について思うことを自由に話し合ってもらった¹⁹⁾。これには二つのねらいがある。一つは、この問題に対する内容スキーマの喚起である。レジ袋などの身近な問題から CO₂ 排出権取引などの国際的な政治議題まで幅広く触れる機会のある話題とは言え、学生たちの多くにとって「温暖化」は、耳慣れた言葉ではあるがよく知らない問題の一つである。そこで議論の様子を見て各グループに、なぜ化石燃料を燃やしたり森林が減少したりすると CO₂ が増えるのか、CO₂ が増えるとなぜ平均気温が上昇するのかといった基本的なメカニズムを問い、知っている者が説明したり資料に拠ったりするよう促した。もう一つのねらいは、‘greenhouse effect’・‘CO₂ emissions’・‘glacier’といった語彙に触れさせることである。ここでは資料を細部まで理解することは求めないので特に個々の語彙について解説はしないが、辞書を引くにせよ図表などの文脈から推測するにせよ、こうした語彙を提示しておくことが以降の記事の導入に間接的に役立つと考えた。

次に、A3 一枚 (850 語程度) の *National Geographic* の記事 ‘What is Global Warming’ を読んでもらった²⁰⁾。ただし、配布された記事は小見出し (sub-headline) が空欄になっており、学生は次の 4 つを適切な場所に当てはめることが求められた。

- (30)
- a. Aren't temperature changes natural?
 - b. Why is this a concern?
 - c. The Planet is Heating Up—and Fast
 - d. Greenhouse effect

月刊・週刊の雑誌は、新聞とは異なり、必ずしも重点先行型の記事構成をしているとは限らないが、小見出しにはそこで書かれている内容が集約されている。小見出しを選べたからといって内容を十分に把握にしているとは言えないが、小見出しで記事の内容や流れを推測できるし、その節の主旨を理解していなければ適切な選択はできないという意味で、小見出しの空欄補充は読解の手がかりを提供すると同時に、形式スキーマの適用を促すと考ええる。

一通り目を通してグループで予想をまとめたら、小見出しの埋まった記事を配布し、自分たちの記事で用いる要約の作成作業に移った。新聞ほど明確ではないにせよ、やはり小見出しに近い段落であればあるほど重要な情報が述べられており、学生は自ずと各節の冒頭部に目を向けることになる。しかし、冒頭部をつなぐだけでは、A4一枚の記事に収めるには量が多過ぎる。そこからさらに必要最低限の内容を抜き出さなければならない。そこで、作業に移る前に次のような要約作成のガイドラインを与えた（天満 1989: 116-8; 1994: 106-9）。

(31) a. Deletion: 不必要な箇所、余剰的な箇所を省略する。

b. Superordination: 個々の単語を上位の単語で代行する。

① 同類に属する単語を上位の単語で代表させる。

(例) cats, dogs, goldfish, gerbils, parrots → **pets**

② 個々の行動を上位の行動に統合する。

(例) John left the house. John went to the train station. John bought a ticket. John got in the train. John arrived in London. → **John went to London.**

c. Selection: 主題文を選ぶ。

d. Invention: 主題文がテキストに明示されていない場合は、自分たちでそれを作る。これをもとに例えば(32)のような要約を作成するのが目標だが、この時点では記事の理解や要約の出来を問わず、二週間後までに各グループで要約を作成し、それを雑誌記事風の日本語に訳しておくことを求めた。

(32) Global warming is causing a set of changes to the Earth's climate, or long-term weather patterns, first of all, by the "greenhouse effect", which is the warming that happens when the gases in Earth's atmosphere trap heat. Levels of greenhouse gases (GHGs) have gone up and down over the Earth's history, but they have been fairly constant for the past few thousand years. However, now, humans have increased the amount of carbon dioxide in the atmosphere by more than a third since the industrial revolution. The rapid rise in greenhouse gases is a problem because it is changing the climate faster than some living things may be able to adapt.

3. 2. 2. WHAT HAPPENS NEXT?

この活動では、各人が読んだ異なる新聞記事の内容をグループに持ち寄ることで、温暖化によって自然や社会にもたらされる変化・問題を複数の観点から捉え、自分たちの記事で特に何を伝えたいかを考えるのが目的である。

まず、グループ内でカードを引いてもらって1番から4番までの「取材担当」を決め、同じ

番号の担当ごとに集まってもらった。担当ごとに異なる新聞記事が配布され、作業中は自分たちの担当記事を見せても他の番号の記事を見てもいけないので、各グループでその記事について知っているのは担当記者だけであり、後で自分のグループに取材内容を報告できるようにしっかりと読んでおかなければならないということになる。言わばジグソー学習の応用である(三浦・中嶋・池岡 2006: 171-8)。

配布される記事は、点線で囲まれた冒頭部以外の段落順序がバラバラになっており、担当記者には、タイトルと冒頭部を読んで、後に続く七部分を正しい順序に並び替えることが求められた。同時に、同じ担当の記者と相談し合いながら、自分のグループへの取材報告として点線で囲まれた冒頭部を訳してもらった。つまりここでは、新聞記事の特性を利用して、3.2よりも明示的に冒頭部に注目させ、その内容を理解することによって段落整序の予測がしやすくなることを実感してもらうことをねらっている。500～700語からなる記事の内容を一読で理解するのは用意ではないが、冒頭部の理解をもとに各段落の一、二文目を読んでいくと、話の流れの大まかな推測はできるし、少なくない学生が正解する。中には、‘in addition’や‘however’といった、1.1.1.で述べた構造を読み解く手がかりとなる語句を予想の根拠とする者や、(9)で述べた照応関係を手がかりに予想する者も見られた。

次に、グループに戻って取材報告・編集会議をしてもらった。具体的には、次のように各記事の冒頭部を集めたプリントを配布し、時間を区切りながら記事ごとにざっと目を通してもらい、その後、担当記者に口頭で主旨を説明してもらった。

- (33) a. ‘Climate change could lead to global conflict, says Beckett.’ by Jilian Borger, *The Guardian*, May 11, 2007.

Climate change could spawn a new era of conflicts around the world over water and other scarce resources unless more is done to curb greenhouse gas emissions, the foreign secretary, Margaret Beckett, warned yesterday.

She said climate-driven conflicts were already under way in Africa. Underlying the Darfur crisis, she said, was a “struggle between nomadic and pastoral communities for resources made more scarce through a changing climate.”

- b. ‘We have the technology to tackle global warming, scientists say.’ by Philippe Naughton and agencies in Bangkok, *Times Online*, May 4, 2007.

Tackling global warming need not cost the Earth, a panel of UN scientists said today. In the third in a series of reports, the Intergovernmental Panel on Climate Change (IPCC), said that keeping the rise in temperatures to within 2C would cost only 0.12 per cent of annual gross domestic product if governments exploited new technologies to cut greenhouse gas emissions.

- c. ‘Why global warming is not natural.’ by Mark Henderson, *The Times*, February 19, 2005.

THE strongest evidence yet that global warming has been triggered by human activity has emerged from a study of rising temperatures in the oceans.

The rise in marine temperatures – by an average of 0.5C (0.9F) in 40 years – can be

explained only if greenhouse gas emissions are responsible, research has shown. The results are so compelling that they should end controversy about the causes of climate change, one of the scientists who led the study said yesterday.

- d. 'Climate change will bring health risks.' by Cesar Chelala, *The Japan Times*, May 1, 2007.

Much attention has been devoted in recent times to the environmental and economic effects of climate change. Much less attention, however, has been given to the possible effects of climate change, particularly global warming, on the health of the populations, particularly those from the poorest countries. This is a trend that requires prompt attention if the deleterious effects of climate change on health are to be avoided. The recently released U.N. Climate Report states that at least 1 in 6 people worldwide will suffer the consequences of climate change.

他の者はプリントに用意された空欄にメモを取りながら報告を聞き、これをもとに4つの「ネタ」の中で自分たちの記事の中に必要な情報は何か、それをどう配置するかを話し合ってもらった。3. 2. と同様に、③をつないただけではA4一枚の記事には文量が多過ぎるからである。

4つの記事は、次の順序に並べることで一つの筋が構成できるよう意図して選んでいる。(c)「温暖化による気候変動（とりわけ海水温の上昇は、人為的な温室効果ガスの排出でしか説明できないということ）」→(a)「気候変動による資源をめぐる争いの激化の懸念（のみならず、現に起こっている紛争とも無関係ではないということ）」・(d)「温暖化による（心臓疾患・伝染病・自然災害などで特に貧しい人たちが被る）直接・間接の健康被害の懸念」→(b)「温暖化対策にかかる（そう多くない）コストと利用可能な科学技術の見通し」。しかし、これはあくまで一つの例に過ぎず、作ろうとする記事の性格によって4つの記事のどれかに重きを置いても構わないし、どこから別の情報を持ってくる構わないので、この筋は学生たちに提示していない。また、どこに重きを置くかは、次の具体的対策として紹介するものに何を選ぶかとの関係で決まってくることでもあるので、この時点では結論を求めず、点線部分や記者の報告を利用して要約を作成しておくことを勧めるにとどめた。

3. 2. 3. WHAT CAN WE DO?

この活動では、温暖化に対してどのような具体的対策があり得るのかを概観し、自分たちの記事で紹介するものを選び取って、構成を固めるのが目的である。

まずDVDで、Davis Guggenheim 監督の『不都合な真実』(An Inconvenient Truth: A global warning)の前半と後半の6つの章を見せた²¹⁾。前半は、3. 2. の内容スキーマの喚起とも重なる基本事項の映像による確認であり、記事の前半部を仕上げる上で説明の仕方の参考にしてみようのがねらいである。後半は、地球温暖化を可能な限り自分たちの問題として捉えてもらうことと、Al Goreのプレゼンテーション・テクニック、特に映像資料の効果的提示に学ぶのがねらいである。視聴前に、次の前半と後半の章題をそれぞれ日本語に訳してもらった。

- (34) Ch. 3: The basic science of global warming.
Ch. 4: A better explanation: “global warming or: none like it hot!”
Ch. 7: Coming off the glaciers.
Ch. 30: The solutions are in our hands.
Ch. 31: Are we capable of rising above ourselves and above history?
Ch. 32: It's our only home.

次に、*TIME* の記事にある15個の対策の中から、グループで話し合っって好きなものを3つ選び、自分たちの記事に収まるように編集してもらった²²⁾。各対策の文量は様々だが、短くても120語程度、長いもので300語程度あるので、いずれにしてもそのままでは記事に収まらない。しかも、自分たちの記事の性格を考慮して3つの対策を選ぶためには各対策の中身を理解する必要があるが、‘Build a skyscraper’ や ‘Give a new life to your old fleece’ など、各対策のタイトルだけではどういう点で温暖化対策になるのか分かり難いものが少なくない。そこで本実践では、記事を前の週に配布し、事前に目を通して来てもらうことにした。さらに、この予習をもとにただけでは話し合いが進まなくなるところで、(35)のように各対策のタイトルを日本語に置き換え、要約の文量の目安を空欄で示す補足資料を配布した。また、一部または全体を用いても構わないこの段落の導入サンプルとして(36)を提示した (*Time*, April 9, 2007: 45)。

- (35) a. 食料を燃料として利用 (Turn food into fuel)
b. 環境に優しい住まい計画 (Get blueprints for a green house)
c. 電球の転換 (Change your lightbulbs)
d. 都市の照明を LED に (Light up your city)
e. 炭素税の導入 (Pay the carbon tax)
f. 「豪邸」からの卒業 (Ditch the McMansion)
g. 乾燥は外に干して (Hang up a clothesline)
h. フリースに第二の人生を (Give new life to your old fleece)
i. 省エネ超高層ビル (Build a skyscraper)
j. 地熱を活用した建築 (Turn up the geothermal heat)
k. お高い古着の再利用 (Take another look at vintage clothes)
l. 炭素の隔離 (Capture the carbon)
m. 従業員の住居を職場近くに (Let employees work close to home)
n. バスの利用 (Ride the bus)
o. 都会への引越し (Move to a high-rise)
- (36) “Can one person slow global warming? Sure! You—along with scientists, businesses and governments—can create paths to cut carbon emissions. Here is 3 measures we can recommend you to take(, with an assessment of their impact and feel-good factor).”

最後に、A4の sample outline と対応させながら、以下の提出記事に必須の要素を説明し、期日までに同じ構成・レイアウトで英語と日本語の記事をそれぞれ一部提出するよう指示した。

- (37) (i) 日付
 (ii) 記事のタイトル
 (iii) 全員の名前とグループ名
 (*) 3つの段落をまとめる Lead (任意)
 (iv) ‘global warming’ とは何か (現象・原因) を説明する段落
 (v) ‘global warming’ によって自然や社会にもたらされる変化・問題 (の予測) を説明する段落
 (vi) ‘global warming’ をくい止めるための具体的対策3つを紹介する段落

締め切りが最終回の前だったため提出された各記事にコメントを加えたり英文の誤りを訂正したりする時間的余裕はなかったが、提出された全ての記事を冊子にまとめ学生に配布した。学生の記事例2つを次ページに示す。

6) July 25, 2007 (Date)
 (ii) “ ” (Headline)
 (iii) Your names, ... Group (write(s) your)
 (Lead(optional))
 (iv) (What is global warming?)
 (v) (What happens next?)
 (vi) (What can we do?)
 Can one person slow global warming? Sure! You—along with scientists, businesses and governments—can create paths to cut carbon emissions. Here is 3 measures we can recommend you to take, with an assessment of their impact and feel-good factor.
 1. 2. 3.

4. 授業の評価と課題

以上の授業は、学生にどのように受け止められただろうか。ここでは、大学が実施する全学共通の Web システムを用いた授業評価に基づいて、授業実践全体の評価を行なうことにしたい。

授業の内容・方法・質問への対応に関しては8割以上の支持を得たものの、難易度・進行度が適切だと判断したものは6割にとどまる²³⁾。われわれの目指す水準の高い授業プログラムの観点からすれば、全体としてはかろうじて合格点をもらったところだろう。次の自由記述欄の感想に見られるように、読解スキルの理解・習熟が教科書の読解にも有効だという本実践のねらいが十分に伝わらず、教科書の学習が読解スキルの学習とその適用を伴うコミュニケーション活動とは切り離されたままの学生もいるからである。

- ・いろいろな工夫をしてくれているのは感じたのですが、教科書の内容をもっと丁寧にやってほしかったです。
- ・正直かなり難しかった。。先生の説明はゆっくりでわかりやすかったけど要約の課題とか自信がなさすぎてわからなすぎて毎回かなり大変だった。教科書の授業ではどこが大切なのがいまいちわからなかった。

ただ、次の感想を見ると入学当初の成績・動機の低い学生たちからも一定の評価が得られており、難しいことが必ずしも授業に対する満足度を下げるわけではないことを示している。また、三つ目の感想は本実践がこの学生の持つ英語の授業のイメージを良い意味で裏切るものであったことを示しており、最後の感想は3.で解説した実践が楽しい授業として直接評価されている。両感想を見ても、(大学) 英語教育におけるグループワーク、特に話し合いや作業分担を伴う協力的学習としてのグループワークの有効性はもっと積極的に評価されてもよいだろう。

- ・大変楽しかった。英語を楽しんで習得できそうだった。英語が苦手な自分ですが、

“Truth of Global warming”

~All we need is ... ~

Today, the earth is crying and hurting because of global warming. It is not too much to say global warming is stopped by humans. We need to cooperate with around the world people in order to reduce greenhouse gases emissions and stop global warming. If everyone loves the earth from bottom of heart, global warming will stop. All we need is “love”.

~ What is global warming? ~

Global warming is temperature rise by greenhouse gases that are emitted by humans. Greenhouse gases keep heat from escaping to outside. It is said main cause of global warming for recent 50 years is “human activity” such as combustion of fossil fuel. It's necessary to restrain the rise in heat to 2°C or less to evade the influence of serious global warming. It's a trial calculation that it's necessary to reduce the amount of greenhouse gases emission in the entire world of 2050 to 50% or less of the level of 1990 to restrain it to 2°C or less. So we have to unite with around the world people, and stop global warming.

~ What happens next? ~

It's said if global warming lasts as it is, an average temperature will rise from 1.4°C to 5.8°C by 2100. Then, it is said that tropical forests of 1420ha (about 2/3 of Honshu) disappear every year, and 70 percent of the region on the earth that can be cultivated is influenced of desertification. It's also said the living thing from 17,000 to 50,000 will be extinct in the world by 2020, and some obstacles will be caused about 5 billion people in a usual obtaining of water in 2025. After all, the cause of these problems arrives at the point that humans emitted greenhouse gases such as carbon dioxide too much.

~ Do our best! ~

Can one person slow global warming? Sure! You—along with scientists, businesses and governments—can create paths to cut carbon emissions. Here are 3 measures we can recommend you to take.

① Pay the carbon tax: Today, the carbon tax has been introduced into such as Finland, Sweden, Denmark, etc. The carbon tax is an economical policy that levies a tax on fossil fuels as to content of carbon and restrains demand for the carbon, and thus we can restrain carbon dioxide emissions. Enterprises or individual who try to cut down carbon dioxide emissions make a profit, while enterprises or individual who neglect cutting down carbon dioxide emissions bear some responsibility. So the carbon tax is fair policy that is rewarded for efforts at environmental preservation. Businesses and governments haven't figured out how the two competing regimes can work together, but in the end, the world may need both.

② Use valuable used clothing: Reuse of clothes can avoid consuming all the energy used in producing and shopping a new one and, therefore, the carbon emissions associated with it. Most of clothes are made from oil, so if we reuse the clothing, we can restrain carbon dioxide emission. Posture to work on global warming prevention by exchanging the friend for clothes each other, and buying used clothing is important.

③ Ride the bus: We can reduce greenhouse gases by riding the bus. In America, public transit saves an estimated 5.3 billion liter of gas annually, which translates into about 1.4 million tons of carbon dioxide. Buses emit more carbon than trains, but that can be minimized by using hybrid or compressed-natural-gas engines. The world is ready to change. We're just waiting for bus.

It's more important than anything that people in the world think deeply about global warming prevention and do our best for the earth, and for the future.

2007年7月28日

英語 1A

“地球温暖化の真実”

~必用なもの~

今、地球は嘆き苦しんでいる。温暖化により様々な点で苦しんでいるのだ。この温暖化を進めているのは人間であると言っても過言ではない。原因と言われている温室効果ガスを減らし、温暖化を食い止めるには世界中の人々の協力が必要である。誰もが皆地球へ愛を持って温暖化はとまるはずだ。今我々に必要なものは“愛”である。

~温暖化とは~

地球温暖化とは、人間の社会活動によって排出された二酸化炭素などの温室効果ガスによって、太陽の放射熱が外に逃げず、地球全体の気温が上昇することである。過去 50 年間にわたる温暖化の主な原因は森林の伐採、石炭・石油のような化石燃料の燃焼などの“人間活動”だと言われている。深刻な温暖化の影響を回避するには、温度上昇を 2℃以下に抑えなければならぬ。2℃以下に抑えるには 2050 年の世界全体の温室効果ガス排出量を 1990 年レベルの 50%以下に削減する必要があるとの試算である。そのためには、世界全体がひとつのやり、温暖化を食い止めなければならない。

~温暖化の未来~

温暖化はこのまま進むと 2100 年までに 1990 年と比べ平均気温が 1.4~5.8℃上昇すると言われている。そうになると、毎年 1420ha(本州の約 3 分の 2)の熱帯雨林が消失し、地球上の耕作可能地域の 7 割が砂漠化の影響をうけると言われている。そして 1990~2020 年の間に世界で 17~5 万の生物が絶滅、また 2025 年は約 50 億人が水の通常の入手になんらかの支障が生じるとも言われている。これらの現象の原因は根を追究すれば、人間が二酸化炭素などの温室効果ガスを排出しすぎた点に行きつく。

~未来のためにできること~

何の対策も起こさないと、地球の気温はどんどん上昇し、2℃以下に抑えられたとしても温度上昇は起こるので、対応策が必要だと言われている。幾つかの対策があるが、ここに 3 つ示したいと思う。

① 炭素税の導入：現在フィンランド、スウェーデン、デンマークなどで炭素税が導入されている。炭素税とは化石燃料などに、炭素の含有量に応じて税金をかけて、需要を抑制し、結果として二酸化炭素排出量を抑えるという経済的政策手段である。二酸化炭素排出削減に努力した企業や個人が得をし、努力を怠った企業や個人はそれなりの負担をすることになるという、環境保全への努力が報われる公平な仕組みだといえる。炭素税の導入には、まだ財界と政府の考えがまとまっていないが、この対立している 2 つがまとまり、環境保全に取り組むことが必要となるだろう。

② 価値ある古着の利用：服の再利用は、作ったり運んだりするすべてのエネルギーの消費を避けることができる。また、ほとんどの服が石油から作られているため、再利用すれば二酸化炭素の排出も抑えられる。そこで友達と衣類を交換し合ったり、古着を購入したりして、服を再利用することによって、温暖化防止にバスの利用：バスの利用によって温室効果ガスを減らすことができる。アメリカでは、公共交通機関の利用で毎年 68 億ℓの温室効果ガスを抑えることができると見られている。それは 140 万ℓの二酸化炭素に置き換えられる。また、バスは列車より炭素を出すのが、ハイブリッドや圧縮した天然ガスの利用で最小限に抑えることもできる。

③ バスの利用：バスの利用によって温室効果ガスを減らすことができる。アメリカでは、公共交通機関の利用で毎年 68 億ℓの温室効果ガスを抑えることができると見られている。それは 140 万ℓの二酸化炭素に置き換えられる。また、バスは列車より炭素を出すのが、ハイブリッドや圧縮した天然ガスの利用で最小限に抑えることもできる。

以上のようなことを心がけ、世界中の人々が温暖化防止を意識し、そして未来のために今、自分のことをやろうということが何よりも大切である。

Let's start simple things!

★ What is global warming?

Glaciers are melting, sea levels are rising, cloud forests are drying, and wildlife is scrambling to keep pace. It's changing the rhythms of climate that all living things have come to rely upon.

★Green house effect

The 'greenhouse effect' is the warming that happens when certain gases in Earth's atmosphere trap heat. These gases let in light but keep heat from escaping, like the glass walls of a greenhouse. As a result, the climate changes differently in different areas.

★ Aren't temperature changes natural?

Air & Temperature Changes in the Air:
The average global temperature and concentrations of carbon dioxide have fluctuated on a cycle of hundreds of thousands of years as the Earth's position relative to the sun has varied.

★ Why is this a Concern?

Why is this a concern? The rapid rise in greenhouse gas is a problem because it is changing the climate faster than some living things may be able to adapt. Also, a few and more unpredictable climate poses unique challenges to all life.

What happens next?

Climate change could spawn a new era of conflicts around the world over water and other scarce resources, and in Africa, conflicts were a steady under way. And, the evidence yet that global warming has been triggered by human activity has merged. According to the research, it can be explained only if greenhouse gas emissions are responsible. So, governments said that keeping the rise in temperatures to within 2°C would cost only 0.12 per cent of annual gross domestic product. It gave governments explored new technologies to cut greenhouse gas emissions. But, from such a thing, it is people's health that is worried. Global warming is a trend that requires prompt action. So, the disastrous effects of climate change on health also to be avoided.

What can we do?

Will we : Danger that health is impaired by global warming overhangs us. For the first time how from a simple thing to defend us? will.

Let's exchange!!
Buying a new cloth
concern with carbon.
Because of the products are
transported to shop by truck.
It's good for environment,
to exchange clothes with
friend's than to buy
new clothes.

3. Hang up a clothes line. Washing has bad effect on it, but the bad effect can be decreased by simple way. The solution is when they are clean, dry your clothes the natural way, by hanging them on a line. By this way you can reduce CO_2 created by your laundry up to 80%.

Change your lightbulbs
The hottest thing in household energy savings is the compact fluorescent lightbulb (CFL). CFL can last 50% longer than incandescent bulbs. It is not good for environment. On the other hand, light-emitting diodes (LEDs) don't have this problem. So if you can't find CFL, you should use that.

簡単なことからはじめよう!!

世界的に地球温暖化は問題となっている。しかし、身近な事から解決できるのではないだろうか。

●地球温暖化とは何か？

この生エ物に頼っている地球の気候の周期が變つてゐるのだ。

● 温室效果

「地球をとりまく大気がガスが熱をとこめた時、温室効果¹。は地球をあたためている。それらのガスは軽いので空の隅の隅のように散らばるが、温室のガラスの壁のように散らばるにがたない。なる果として、様々な場所が気温が変化している。

●自然に任す

なつてこの温暖化現象、気温の上昇は、置かる。)

なせ地球
問題に

起は、温室効果ガスの急激な上昇は気温を早く変へさせるので、生物がそれに対応できない事である。新しい、そして予測できない気候は、すべての生物に生存の難題をひきおこすのである。

地球温暖化は何なるもお、すのだらうか??

[illegible]

私達に何がで"ける"だらう？

私達には地球温暖化によって健康が害される危険が迫っている。自分達を守るために、簡単なことからはじめてみようだろうか？

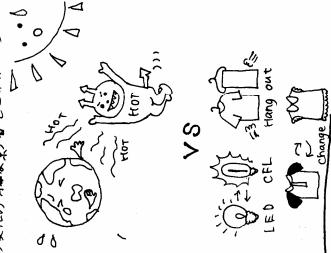
電球の転換

家の中のエネルギーで一番節約ができるのはCFした。しかしCFした5mgの水銀を含むので、環境によくない。一方、LEDは水銀を含まないで環境にいい。もしあなたにLEDに我慢できるなら、それを使えばいいだろう。

交換しよう!

新しい服を買うこといふだけでなく、二酸化炭素放出に関係がある。それは商品をトラックで運ぶからである。

環境を少しでもよくするために、新しい服を買うより、変遷交換箱のものを買い替えた。



この授業はとても楽しんで受けることができました。

- ・工夫された学び方で楽しく勉強できてよかったです。この授業だとあまり英語がいやじゃありませんでした。英語の基本的な考え方がわかった気がします。
- ・グループワークでは積極的にはなせるし、英語なのに楽しい時間でよかった。
- ・〔中略〕英語はあまり得意ではなかったので不安だったのですが、グループごとに相談して答えを出したり、新聞を作ったり、英語の歌のリスニングもとても楽しかったです。また先生もわかりやすく授業をしてくれてとてもよかったです。

また、以下の感想は、それ以外のコミュニケーション活動や使い分けを重視した文法概念の指導が肯定的に受け入れられたことを示している。彼らが(1)の状況を十分に克服できたかどうかは別として、実質を欠いた「(実践的) コミュニケーション能力」にふり回されてきた彼らだからこそ、読解においても authentic な内容を求めていることが窺えると言えよう。

- ・一番楽しい授業だった。英語は嫌いだけれど、簡単なゲームなどが盛り込まれたし、授業もわかりやすかった。そして、宿題の提出法や先生のコメントなどがより一層やる気を起こしてくれたと思います！！
- ・高校とは違った英語の授業が受けて、本当に楽しかったです。テキストを使うだけでなく、授業の始めに洋楽を聞いたり、絵本を読んだり、少しひっかかるような文法問題をやるなど、さまざまを方法で英語に触れることができたので、本当に楽しかったです☆高校までの文法がちがちの授業でなく、毎週楽しみで、英語が大好きになりました。〔後略〕
- ・ネイティブの英語のちょっとしたニュアンスの違いなどの感覚を詳しく教えてくれて、とてもわかりやすかったし、さらに英語に興味をもつことができた。また授業の最初に行っている洋楽のリスニングも楽しんで英語に慣れ親しむことができてよかったです。

2. で述べた授業の手順と半期、あるいは通年の授業構成にはさらに工夫の余地があると言えるものの、学生の感想を見る限り、成績・動機のばらつきに関係なく、大学英語教育、特に読解指導において、文法・読解スキルを楽しく学んでもらえるような実践が可能であることが具体的に示せたのではないかと考える。外国語としての英語の読解指導の内容・方法の体系化に向けた、読解スキルおよびコミュニケーション活動のさらなる考察については今後の課題としたい。

註

- 1) 直接、学習者に向けられたものとしては、岩波ジュニア新書の一連の文献(天満 1994, 1998, 2000; 天満・ベレント 1996)がある。
- 2) 天満(1989)では「テキスト」という言葉が用いられているが、誤解を避けるためここでは「テクスト」に統一している。「背景的知識」(background knowledge)も、天満(2003)では「背景知識」という言葉が用いられているが、言語的知識との対比のために、ここでは背景的知識で統一した。
- 3) イラストは Larson (1986: 135)。質問1および解説は、北海道大学国際広報メディア・観光学院教授・上田雅信氏が同大学の全学教育科目「英語」(1, 2年生対象)の授業で使用した資料に基づいて作成した。
- 4) 「スキーマ」とは「長期記憶内に蓄えられている総称的概念(generic concepts)の表現」であり、1930年代に Bartlett によって心理学に持ち込まれ、読解(指導)研究においては1970年代から80年代にかけて Bransford や Rumelhart, Meyer, Kintsch, あるいは Carrell によって分析的研究が進められた(天満 1989: 10-24; 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編)1992: 11-30)。
- 5) 例えば、津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編)(1992)では、公立高校二年生を対象にして、

パラグラフの構造に関する明示的説明（パラグラフの定義・構造、トピック・センテンスを説明するプリント）を与え、教科書のある章をモデル・パラグラフとしたワークシートを用いた応用練習を50分間の授業で行い、10分の休憩の後に50分間の検証テストを行っている。テストは(1) トピック・センテンスを指摘する設問、(2) パラグラフ内の文の相互関係を指摘する設問、(3) 文章に適した題を指摘する設問、(4) パラグラフの統一性を指摘する設問、(5) 要約問題で構成されており、前半の説明及び応用練習を行わずにテストだけを行ったクラスとの統計比較で、全体および(1)、(2)、(5)の平均点について5%水準での有意差が認められた。特にトピック・センテンスの指摘について明示的な指導の効果が見られたことを指摘している。天満らの研究を含め、読解における内容・形式スキーマの効果を確かめようとする国内外の研究と概念の批判的考察は、柴崎（2003）を参照されたい。

- 6) 雑誌『英語教育』等での単発的な提案を除けば、学術論文としては、語彙の結束性に着目して授業プラン作成法を提案した須部・山下（2003）ぐらいしか見当たらない。これには、1980年代半ばまでの「第二言語読解研究の主流はスキーマ理論を根拠として読解プロセスを検証すること」であったのに、その後、「学習者の読解ストラテジー行使能力と読解力の解明」に関心が移り、「学習者が自己の読解プロセスを自身によって把握する能力（メタ認知）」の英文読解への応用が研究の対象となり始めたことが関係しているかもしれない（木村 2001: 256-7）。
- 7) 本稿では、小山内（2002）の考察に従い、実践で行った活動を総称する概念として「コミュニケーション活動」(communicative activities)を用いる。これは、学習指導要領で用いられる「言語活動」(language (-use) activities) や外国語教育・第二言語習得研究において論者によって定義の異なる「タスク」(communication) tasks) とは異なり、「コミュニケーション能力育成の立場から行う、特別に工夫された総合的言語運用練習」を指す概念である（小山内 2002: 167）。
- 8) Mikulecky and Jeffries (2005) 全体は、「楽しみのリーディング」(reading for pleasure)・「読解スキル」・「思考スキル」(thinking skills)・「もっと速い読み」(reading faster) の4つのセクションからなる。各セクションは簡潔な解説と豊富な問題で構成されており、読解スキル以外のセクションは、それぞれ、読む行為を動機づけ語彙を拡大すること、英語で推論し分析的に考えさせること、ノンフィクションの読解を通じて流暢さを高めることをねらいとしている。
- 9) 天満（1994）は、主旨が述べられている文（topic sentence）が「パラグラフの最初に来ることが断然多い」と指摘している（天満 1994: 37; 天満 1989: 104）。Mikulecky and Jeffries (2005) も‘Skimming for Ideas’の項で同様の助言を与えている（Mikulecky and Jeffries 2005: 142）。
- 10) Leo Lionni の、特にこの3作を選んだ理由は、子ども向けの絵本であり（＝比較的平易な英語で構成されてい）ながら大人が読んでも考えさせられるような哲学的内容を含んでいることに加えて、(8)の構造が見えやすいことがある。いずれも、Setting と二つの Problem および Goal、最後に全体としての明瞭な Ending/Resolution という構造になっていると分析することができ、文章・イラストとの対応もつけやすい。また、仮に谷川俊太郎訳に馴染みがあっても、表現を比較することで原著には違った趣きがあることに気づける。
- 11) 門田（2001）によれば、文の間の論理関係を推測する課題によって、日本人大学生・短大生の英語学習者にとって逆接関係と時間的順序関係が比較的把握しやすいのに対して、具体化関係（example）の論理関係が把握し難いことが明らかになっている（門田 2001: 168-72）。
- 12) 各説明文は、Wikipedia の定義をベースに内容・文量を考慮して編集・作成した。
- 13) 定義・例文として用いたのは、Collins COBUILD Learner's Dictionary: Concise Edition (Harper-Collins, 2003²)、および Collins COBUILD Dictionary on CD-ROM 2006である。
- 14) こうした設問が用意されている点で *The Powerful Reader Basic* は比較的優れた教材だと言えるが、Mikulecky and Jeffries (2005) のような整理や解説はしていない。そこで本実践では、彼女らの読解スキルとその整理に基づくことで、1.1.2. で述べたように、特にパラグラフの構成パターンについて *The Powerful Reader Basic* の設問を活かして、教科書の読解を本実践の読解スキル指導と結びつけようと試みた。

- 15) 各人へのコメントはメールに対する返信でも行った。
- 16) この大域の順序は, Cruse (2004) の叙述の順序に依拠したものである。後期は, (法)助動詞・假定法・(受動)態・There 構文・使役構文・(-ing, -ed で終わるものを中心とする) 形容詞・数量詞・比較構文を扱うことを予定している。
- 17) 詳しい議論は, 亘理 (2007) を参照されたい。
- 18) 言語に対する自覚的知識, つまり, 「言語を客体化し, 言語に省察を加える能力, メタ言語 (言語について語る言語——引用者) を操る能力」を構成する知識を言う (岡田 1998: 158)。
- 19) 図表や写真の出典は *TIME* (Apr. 3, 2006: 34-7)。内容スキーマの喚起という点では, 『不都合な真実』の DVD (3.2.3. を参照) をここで見せても良いだろう (3.2.1. のコミュニケーション活動の実施日がこの DVD の発売以前だったため本実践では選択の余地はなかった)。新聞記事の読解指導において, 内容スキーマを日本語で与える有効性を確かめようと試みた研究として鈴木 (2001) がある。鈴木 (2001) は, 新聞記事の見出しを用いた演習授業で学生が提出したレポートをもとに, 内容スキーマの提示だけでは読解に有効ではなく「日本語による内容スキーマの提示と同時に, その内容スキーマが英文の構造スキーマ [formal schema——引用者] にどのように反映されるかという指導を伴う必要がある」(鈴木 2001: 45) と述べている。その意味で, 先に論説型の形式スキーマの指導と内容スキーマの喚起を置いた本実践の内容構成は妥当なものと言える。しかし, 鈴木 (2001) が構造スキーマとして主に意図しているのは「固有名詞の複数形や名詞の形容詞への転用」といった時事英語に特徴的な語彙使用法であり, この点についての明示的指導は本実践では行っていない。
- 20) 記事の出典は, National Geographic Web Page. June 18, 2007.
(<http://green.nationalgeographic.com/environment/global-warming/gw-overview.html?source=G2300&kwid=global%20warming|780841765>)
- 21) デイビス・グッゲンハイム (Davis Guggenheim) 監督『不都合な真実』(パラマウント・ピクチャーズ, 2007年)
- 22) 記事の出典は *TIME* (Apr. 9, 2007: 46-55)。記事のタイトルは ‘51 Things We Can Do’ で, 20ページ以上を費やして 51 の対策を紹介しているが, 本実践では活動に充てられる時間と学生の処理能力, 選択の幅を考慮して, 最初に紹介されている 15 の対策を使用した。
- 23) 「全体として, この授業を受講して良かったと思いますか?」, 「教科書, レジューメ, ホワイトボード, OHP, プロジェクタの使用などは適切でしたか」, 「教員は, 学生の質問, 意見に対し, 明快に, わかりやすく対応していましたか」について, 五段階評価で「おおいにそう思う」と「どちらかと言えばそう思う」と答えた者の割合は, それぞれ 81.6 %, 92.1 %, 89.5 % (n = 38), 一方, 「授業の難易度は適切でしたか」と「授業の進行度は適切でしたか」に対して「適切であった」と回答した者は, それぞれ 55.3 % と 68.4 % であったが, 「ややむずかしい」と「どちらかと言えば早い」を加えると, それぞれ 81.6 %, 89.5 % となる。

参考文献

- ・Cruse, D. Alan (2000, 2004²). *Meaning in Language*: An introduction to semantics and pragmatics. Oxford: Oxford University Press.
- ・Gregg, Joan Y. and Beth M. Pacheco (2001). *The Powerful Reader Basic*. Tokyo: MacMillan.
- ・Larson, Gary (1986). *The Far Side Gallery 2*. Kansas City: Andrews, McMeel & Parker.
- ・Mikulecky, Beatrice S. and Jeffries, Linda (1986, 1998², 2005³). *Reading Power*: Reading for pleasure, comprehension skills, thinking skills, reading faster. White Plains, NY: Pearson Education.
- ・小山内 洸 (2002) 『英語科授業論の基礎: コミュニケーション重視の言語教育理論研究』リーベル出版
- ・岡田 伸夫 (1998) 「言語理論と言語教育」大津由紀雄ほか (編) 『言語科学と関連領域』[岩波講座言語の科学: 11] 岩波書店, pp. 129-78.
- ・木村 裕三 (2001) 「Ⅶ-2 外国語の読みにおけるメタ認知と読解力」門田修平・野呂忠司 (編) 『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版, pp. 256-70.

- ・小西正恵（2002）「パラグラフ構造」津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ（編）『英文読解のプロセスと指導』, pp. 102-17.
- ・柴崎秀子（2003）「スキーマ理論と第二言語読解研究—過去 20 年間のスキーマ理論を土台にした読解研究における貢献と問題点」『言語情報科学』〔No. 1〕東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻「言語情報科学」編集委員会, pp. 161-74.
- ・JACET SLA 研究会（編）（2005）『文献からみる第二言語習得研究』開拓社
- ・鈴木賢司（2001）「新聞英語の読解過程とスキーマ」『川村学園女子大学研究紀要』〔Vol. 12, No. 1〕川村学園女子大学, pp. 45-54.
- ・須部宗生・山下巖（2003）「英語説明文読解のストラテジーとしての語彙的結束性の活用」『環境と経営』〔Vol. 9, No. 2〕静岡産業大学, pp. 105-114.
- ・高橋幸子（2000）「Facilitating EFL Reading by Teaching Rhetorical Organization」『ノートルダム清心女子大学紀要 外国語・外国文学編』〔Vol. 24, No. 1〕ノートルダム清心女子大学, pp. 116-24.
- ・津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ（編）（1992）『学習者中心の英語読解指導』大修館書店
- ・津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ（編）（2002）『英文読解のプロセスと指導』〔英語教育 21 世紀叢書：9〕大修館書店
- ・寺内正典（2000）「フォーマル・スキーマが日本人外国語学習者の読解力に及ぼす影響に関する縦断的研究」『明の星女子短期大学紀要』〔No. 18〕明の星女子短期大学, pp. 1-32.
- ・天満美智子（1989）『英文読解のストラテジー』大修館書店
- ・天満美智子（1994）『新しい英文読解法』岩波書店〔岩波ジュニア新書：246〕
- ・天満美智子（1998）『新しい英文作成法』岩波書店〔岩波ジュニア新書：306〕
- ・天満美智子（2000）『新しい英文リスニング法』岩波書店〔岩波ジュニア新書：347〕
- ・天満美智子（2003）「リーディング」小池生夫ほか（編）『応用言語学事典』研究社, pp. 54-5.
- ・天満美智子&エリック・ベレント（1996）『やさしい英字新聞入門』岩波書店〔岩波ジュニア新書：280〕
- ・林宅男（2003）「スキーマ理論」小池生夫ほか（編）『応用言語学事典』研究社, pp. 313-4.
- ・三浦孝・中嶋洋一・池岡慎（2006）『ヒューマンな英語授業がしたい！：かかわる，つながるコミュニケーション活動をデザインする』研究社
- ・亙理陽一（2007）「文法指導の教育内容編成の観点から見た『コミュニケーション能力』論の系譜」日本カリキュラム学会第 18 回大会（埼玉），2007 年 7 月，自由研究発表資料